

# —— 言語は感覚の内視鏡 ——

## 共感覚比喩に基づいた形容表現の分析

山 田 仁 子

### 1. 感覚とは

#### 1.1. “五感”と生理学的感觉

多くの人は感覚と言えば“五感”ということばが示すように五種類と考えるのではないだろうか。皮膚で感じる触覚（あるいは皮膚感覚）、舌で感じる味覚、鼻で感じる嗅覚、目で感じる視覚、耳で感じる聴覚。こうした一般的な分類においては、感覚は人間が持つ受容器官“五官”に対応するものとして捉えられている。

しかし生理学の世界では人間の感覚は九つ以上と言われる。生理学的に見れば、一つの器官が感じる感覚は一つとは限らない。人が何か外界の刺激を感じる時、各器官は一つの刺激をいわば分解して受け止めている。例えば、皮膚組織中には軽い接触のみを感じる点、強い接触を感じる点、熱さを感じる点、冷たさを感じる点、痛みを感じる点がそれぞれ別個に存在する。皮膚で感じる感覚は触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚に分類できるのである。また舌という一つの器官も、甘さ、しょっぱさ、酸っぱさ、苦さを受け止める箇所に分かれている。つまり一かけの食べ物、一杯の飲み物も、複数の場所で複数の味わい方をされていると言える。

更に、感覚器官として意識されにくい部分でも人は刺激を受け止めている。耳の奥にある器官で人は音以外のものを感じる。これは前庭感覚と呼ばれ、人が外界に対して平衡を保つのに用いられる。全身に散在する関節や筋肉の中には身体の運動と位置を把握する神経終末があり、どの部分が働くかは人の動きに合わせて変化する。こうして捉えられる感覚は筋運動感覚と呼ばれ、人が運動する時に役立つと言われる。

外界からのたった一つの刺激も、受容器官上では分解され、異なる神経経路を通して脳へ伝えられる。また刺激を受け止める受容器官は肉眼で観察できるものだけではない。生理学上の“感覚”とは、刺激が脳へ伝わるまでの経路の種類に対応したものと言えるだろう。

## 1.2.再編成される感覚

生理学的感覚の存在を知ると、一般的な感覚の捉え方つまり誰の目にも見える受容器官だけをもとに感覚を五つとすることが、あまりにナイーブな捉え方に見えて来る。しかし刺激が脳へ伝わる神経経路を生理学的に細密に分類しても、人間の知覚の体系全てを正しく捉えることにはならないであろう。生理学的に分類された数多い感覚を、人が全て別個のものとしてそのまま認識しているとは考えられないからである。例えば人が風呂の湯加減を見るとき、人は温覚と冷覚を各々独立したものと意識したりはしない。二つの感覚が同時に働いて人は湯の温度を感じ取る。スープの味などについても同様のことがある。一口スプーンで口に入れたときに多少まずければ、塩味が足りない、苦みがある、と味の要素を切り離して感じることはあるが、スープの味は味として、おいしい、まずいと一まとまりのものとして人は受け止める。また、人の目が直接に受け止めるのは光だけと言われる。しかし人は道を歩いていてそこに電柱が立っているのや目の前を人が歩いたりするのを“見る”ことができる。

外界からの物理的刺激が人間に与えられると、刺激は各器官において生理学的にはいくつかの別個の感覚として一旦は分類される。しかし各神経経路を伝わって脳まで達した各感覚はその後、再び整理し直されると考えられる。いくつかの生理学的感覚が総合されて、一つの判断が下される。例えば、先に挙げた例で言うと、風呂の湯など物の温度をみるとときには温覚と冷覚が組み合わさる。舌が甘み辛みなどを感じる部分に分かれていても、各々の部分での感覚が統合されて、味は味として判断される。物の位置は二つの目（網膜）という異なる器官が捉えた像を合わせ判断されるから、この場合二つの生理学的感覚が組み合わされていると言ってもよいだろう。このように外界からの刺激によって起きた複数の生理学的感覚は、脳において再編成されることになるが、その生理学的感覚の結び付きには規則性があると思われる。冷覚と温覚の結び付きは非常に強いものと思われるし、左右の目で受ける感覚も切り離し難い。脳に伝えられた生理学的感覚は、温度、物の位置などの判断を下すために、新たに整理統合されるのである。

生理学的感覚がどのように整理統合されるのかという問題は、人間の知覚の体系あるいは認知システムを解明する上で、重要な意味を持つと思われる。人間の認知システムにおいては、この新たにグループ分けされたものが、生理学的感覚の次の段階の“感覚”として位置づけられる。この段階の“感覚”の方が脳レベルのものであるので、人間の意識には感覚として馴染みやすいと予想される。生理学的感覚の中には狭義の触覚、圧覚や前庭感覚など、それだけでは“感

覚”として人に意識されにくいものも多い。一方、狭義の触覚と圧覚を統合して感じる“手触り”を感覚として扱うことに人は抵抗を感じないであろう。ただ注意しなければならないのは「人が感覚として扱うことに抵抗を感じない」ということだけを、こうした再編成された感覚として認める基準とはできないという点である。人が感覚として意識するかどうかは文化、慣習によるところが大きい。特に日本では“感覚”と言うかわりに“五感”と言うことの方が多くくらいなので、感覚は五つという固定観念が強いように思われる。だから逆に“五感”以外に感覚を認めることには、抵抗を感じる人が多いであろう。しかし先にも述べたように、肉眼で見える感覚器官が五つだから、“五感”という表現があるから、という理由だけで感覚を五つとしてしまうのは、あまりにナイーブで不十分な分類方法である。

## 2. 感覚を知るカギはことば —— 共感覚比喩 ——

脳で再編成される感覚を知るカギとしてことばが挙げられる。ことばには、確かに文化、慣習も反映されるが、国や文化が変わっても理解できるような人間本来の認識のしかたも大きく反映されるものである。ことばは人間が使うのだから、人間の認識方法から外れることはない。理想を言えば、文化、慣習の異なる多くの言語を調べ、比較して、文化、慣習に依る部分とその他の人間本来の認識方法に依る部分に整理できれば、人間の認知システムのかなりの部分が明らかになるであろう。

感覚を表す単語は数多いが、脳で再編成された後の感覚の体系は、共感覚比喩と呼ばれる表現がカギとなる。共感覚比喩とは、“甘い声”“暖かな色”というように、聴覚経験であるはずの声を“甘い”という味覚の形容詞で表したり、視覚経験である色を“暖かな”という触覚の形容詞で表すような、ある感覚経験を本来他の感覚経験を表すはずのことばで表現するものを言う。この共感覚比喩がここで重要な意味を持つのは、共感覚比喩がただ慣用的に存在しているわけではなく、私たち人間に備わった感覚の仕組みに基づいていると考えられるからである。つまり耳で聞いた音を舌で味わうように人が感じるができるから、“甘い声”といった表現ができるのであり、色を目で見て、暖かいものに触れた時のように感じるができるから、“暖かな色”という表現ができるのである。仮に共感覚比喩が、ただ慣用的あるいは修辭的表現であるとする、あらゆる感覚の組み合わせによる比喩が可能なはずだが、“うるさい手触り”“赤い味”というように、聴覚経験を表す形容詞で触覚経験を表現したり、視覚経

験を表す形容詞で味覚経験を表現することはできない。触覚経験にいたっては、他のどの感覚経験を表す形容詞でも表現することはできない。英語の場合も“sweet sound”と味覚を表す形容詞で聴覚経験を表現することはできても“yellow taste”などと視覚を表す形容詞で味覚を表現することはできない。日本語と英語だけでは資料不足ではあり、またこの二国語間でも完全に一致するわけではないが、感覚経験を別の感覚に固有の形容詞で表現できる方向には、共通した一方向性が見られる。このような言語の違いを越えた共通性は、人間の感覚の在り方そのものを示していると思われる。つまり人は恋人の声を舌で味わうような感覚で捉えはしても、じゅうたんの手触りを耳で聞く感覚で捉えることは難しいのである。

これまでの共感覚比喩に関する研究においては、感覚自体の見直しはなされず、一般に感覚として認められてきた五感だけか、あるいはこれに次元の感覚を加えたものを感覚全てとする前提のもとに、これら五つないし六つの感覚間に見られる比喩の方向が論じられてきた。山田（1992）では五感の他に、次元、動静、気分の三つの感覚が存在することを、共感覚比喩表現から証明したが、これもまだ部分的な修正の枠を越えていない。感覚自体の見直しが必要となった今、逆に、まずは感覚の枠をできる限り取り去って、ことばだけのレベルで比喩可能な方向を観察、整理する必要がある。その結果自然にまとまりを成すものを、一つの感覚として認めるべきであろう。具体的には比喩表現をとにかく可能な限り数多く収集しなければならない。もっとも、共感覚比喩を含め比喩が見られるのは、“甘い声”といった「形容詞＋名詞」の組み合わせばかりではない。“鼻をつく匂い”といった動詞を含む表現も、嗅覚を触覚的に表す共感覚比喩である。しかし、あらゆる品詞のあらゆる表現を全て扱うとなると收拾がつかなくなるので、本論では以下とりあえず、日本語の形容詞を中心に、名詞を形容する表現について分析する。形容表現全体において形容の方向をまとめれば、言語全体の中での“感覚”形容語の位置が明確になると予想される。今回は全体像を捉えることを主眼に置き、感覚の完全な分類については今後の課題としたい。

### 3. 形容表現の分析

#### 3.1. いわゆる感覚を表す名詞にかかる形容表現

まず、いわゆる五感を指すとされてきた名詞、及び山田（1992）で証明した感覚のうち、“動静”と“気分”にあたる名詞について、これを形容する表現を

分析する(ただし次元を指す名詞は特定できない)。具体的には、“手触り”“動き”“味”“匂い”“光”“色”“気分”“音”について、各々を形容する表現を調べてみたい。“光”と“色”については従来同じ視覚として、ひとまとめに扱われてきたが、“光”と“色”を表す形容表現にはかなりの違いがあると思われるので、ここでは分けて考察したい。

“手触り”を形容する表現を似たものでまとめると、次のように分類できる。具体例も合わせ示している。もっとも、触覚に固有とされる形容表現として“かるい”を挙げたが、本来この語は、何かを触るというより、持ち上げる時の感覚(生理学的には、筋運動感覚が中心を占める感覚と思われる)を表す語であるから、“手触り”等を形容する場合これは共感覚による比喩表現とすべきかもしれない。

(1) 触覚に固有の表現

やわらかな、かたい、あたたかい、つめたい、ぬるい、かるい、  
ざらつく、なめらかな、すべすべした、つるつるした、ふわふわ  
した

(2) 説明的表現

絹の、木の、餅のような、氷のような、おろしたてのタオルみた  
いな

(3) その他の表現

いい、わるい、いやな、おもしろい

“動き”を形容する表現を分類すると、“手触り”を形容する表現の場合よりも種類が一つ多くなる。共感覚により、触覚に固有の形容表現が動静感覚の経験を表現するのに用いられ、「動きが固い」といった表現も可能となるからである。尚、動静感覚の形容表現として下に挙げた、“落ち着いた”“落ち着かない”の語の意味の中には、“落ち”の部分が示すように上から下という次元感覚の要素も含まれている。

(1) 動静感覚に固有の表現

激しい、穏やかな、静かな、荒い、弾んだ、はやい、おそい、落  
ち着いた、落ち着かない

(2) 説明的表現

床を這うような、元気いっぱい

(3) 触覚に固有の表現

やわらかな、かたい、なめらかな、おもい、かるい(かるやかな)

(4) その他の表現

いい、わるい、いやな、おもしろい、かすかな

“味”を形容する表現は，“動き”を形容する表現よりも種類が更に二つ多くなる。共感覚により、触覚に固有の語も、動静感覚に固有の語も用いられ、そのうえ、次元の表現もわずかながら使われる例が見られるからである。

(1) 味覚に固有の表現

おいしい、まずい、あまい、すっぱい、にがい、からい、しょっぱい、しぶい

(2) 説明的表現

豆腐の、キャンディーの、糊のような、ほっぺが落ちそうな

(3) 触覚に固有の表現

やわらかな、なめらかな、さらっとした、かるい

(4) 動静感覚に固有の表現

激しい、穏やかな、強烈な、単調な

(5) 次元を表す表現

深みのある、平板な

(6) その他の表現

いい、わるい、いやな、おもしろい、きつい、かすかな

“匂い”を形容する表現は、更に一種類多い。共感覚により“味”を形容する表現がほぼそのまま用いられるうえに，“匂い”自体を表す表現が加わるのである。

(1) 嗅覚に固有の表現

くさい

(2) 説明的表現

花の、チーズの、たばこの、焦げ臭い、腐ったような、うっとりするような

(3) 触覚に固有の表現

やわらかな、さらっとした、おもい、かるい

(4) 動静感覚に固有の表現

激しい、穏やかな、強烈な

(5) 次元を表す表現

深みのある

(6) 味覚に固有の表現

あまい, すっぱい

(7) その他の表現

いい, わるい, いやな, おもしろい, 強い, 弱い, きつい, かすかな

“光”を形容する表現は、種類も数も少ない。他の名詞には用いられる“いい”“わるい”という形容詞も使いにくい。

(1) 本来, 光を表す表現

明るい, 暗い, まばゆい, まぶしい, ぼんやりした

(2) 説明的表現

太陽の, 月の, 鏡を反射した, カーテン越しの

(3) 触覚に固有の表現

やわらかな, 冷たい

(4) 動静感覚に固有の表現

激しい, 穏やかな, 静かな, 強烈な

(5) その他の表現

強い, 弱い, きつい, かすかな

“気分”を形容する表現は以下のようにまとめられる。“味”を形容する表現の種類に, “光”と“気分”の表現が加わっている。

(1) 本来, 気分を表す表現

陽気な, 陰気な, さびしい, 悲しい, 楽しい, 苦しい

(2) 説明的表現

日向ぼっこしてるような, 急に年を取ったような

(3) 触覚に固有の表現

あたたかい, 寒々とした, おもい, かるい

(4) 動静感覚に固有の表現

穏やかな, 静かな, 弾んだ, 落ち着いた, 落ち着かない

(5) 次元を表す表現

うわついた, 舞い上がった, 沈んだ, どん底の, 落ち込んだ

(6) 味覚に固有の表現

あまい, 苦々しい

(7) 光を表す表現

明るい、暗い、ぼんやりした

(8) その他の表現

いい、わるい、いやな

“色”を形容する表現は、気分を表す表現が用いられるので、次の通り“気分”の場合より更に種類多くなる。

(1) 本来、色を表す表現

赤い、青い、黄色の、黒い、白い

(2) 説明的表現

バナナの、海の、夕日に染まった

(3) 触覚に固有の表現

やわらかな、つめたい、あたたかい、おもい、かるい

(4) 動静感覚に固有の表現

激しい、穏やかな、静かな、強烈な、落ち着いた

(5) 次元を表す表現

深みのある、沈んだ、平板な

(6) 味覚に固有の表現

あまい、苦い

(7) 光を表す表現

明るい、暗い、ぼんやりした、くすんだ

(8) 気分を表す表現

陽気な、陰気な、さびしい、悲しい、楽しい

(9) その他の表現

いい、わるい、いやな、おもしろい、強い、弱い、きつい

“音”を形容する表現は、“色”自体の表現は用いられないが、聴覚固有の表現が用いられるので、種類としては“色”の場合と同数になる。また目立つ特徴としては、他では例はあってもわずかだった次元感覚の形容詞が、数多く用いられる点が挙げられる。

(1) 聴覚に固有の表現

うるさい、にぎやかな

(2) 説明的表現

雷の、雨の、氷を砕く、ドアをたたく

(3) 触覚に固有の表現



やわらかな、なめらかな、つめたい、あたたかい、おもい（重々しい）、かるい

(4) 動静感覚に固有の表現

激しい、穏やかな、静かな、落ち着いた、単調な

(5) 次元感覚に固有の表現

大きな、小さな、太い、細い、高い、低い、深い、平板な

(6) 味覚に固有の表現

あまい

(7) 光を表す表現

明るい、暗い、ぼんやりした

(8) 気分を表す表現

陽気な、陰気な、さびしい、悲しい、楽しい

(9) その他の表現

いい、わるい、いやな、おもしろい、強い、弱い、かすかな

以上、感覚を指す名詞について、これを形容する表現を個別に見てきたわけであるが、ここで全体について注目すべき点をまとめてみたい。

まず、全ての場合に共通しているのは、当然のことながら、各名詞が表す感覚に固有の形容表現と説明的表現が用いられるということである。他の感覚に固有の形容表現のうち何が用いられるかについては、各名詞で異なっているが、多くの名詞について共通する点が他にあることが、上の分類より明らかとなっている。それは、各名詞についての分類では最後に挙げた“その他の表現”に見られる語である。“いい”“わるい”“いやな”“おもしろい”といった語は光以外全ての場合に用いられる。また、“強い”“弱い”は光、匂い、色、音には問題なく用いられ、触覚、動静、味と気分についても「強い圧迫」「動きが弱まった」「甘みが強い」「気が弱くなってる」といった表現は可能である。このような語をまた別の感覚の語であるとして、感覚の体系をまとめることも可能かと思われるが、感覚と判断するかどうかについては、今回は結論を出すことは控え、こうした語も含めた“形容表現”の体系を探ることに集中したい。ただ“強い”“弱い”といった語は本来外から受ける圧力に対する性質を表す語であるから、触覚に近い関係にあるのかもしれない。一方、“いい”“わるい”などの語は、従来の感覚形容語とはまた別のグループを成すと言えそうである。

次に、各名詞について、他のどの感覚の形容語が用いられるかという点に注目しなければならない。ほぼここで扱った順番で、使用可能な感覚形容表現の

種類は増えて行っている。Williams (1976)が共感覚比喻の方向に一方方向性があることを指摘して示した、共感覚比喻の体系に一致する点が多いが、光と色を分ける必要性を今回の結果が示すなど、修正すべき点も多い。Williams の共感覚比喻の体系を下に示し、つづいて今回の分析の結果出てくる新たな体系をまとめてみたい。尚、FIGURE 2では、例えば次元から聴覚のように、直接矢印で結ばれていなくても、間接的につながっていれば、形容可能であることを示すものとする。

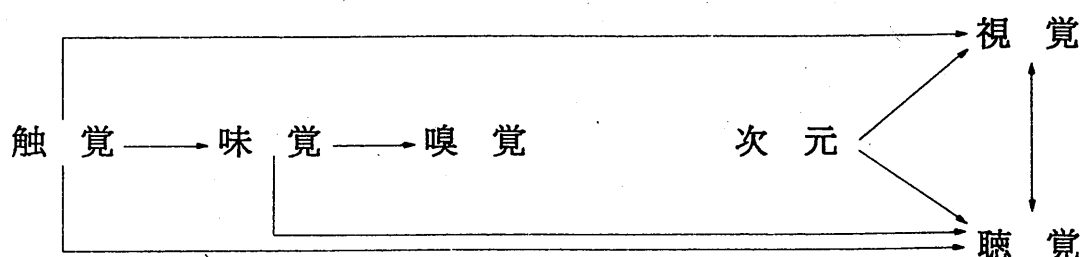


FIGURE 1. Williams の共感覚比喻の体系

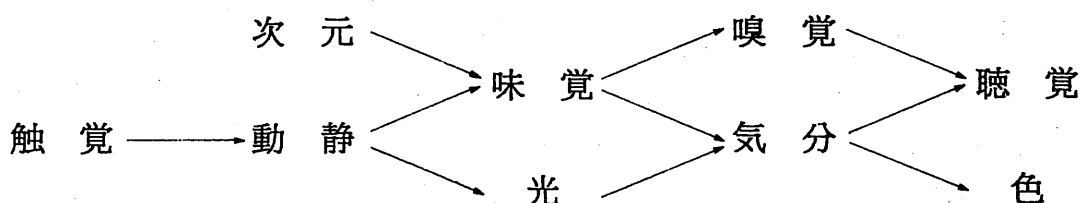


FIGURE 2. 共感覚比喻の体系 山田 (1993)

### 3.2. 感覚以外の事物を表す形容表現

次に、感覚以外の事物を形容する表現の分類を、試みる。人が事物を受け止め判断する時、そのやり方はまず大きくは二通りに分けられる。一つは物理的に生理学的感覚を通じての感じ方。そしてもう一つは、物理的な生理学的感覚を通さず、直接脳レベルで感じ取る方法である。例として、人が他の人を判断する場合を考えよう。太郎君が花子さんをどう思っているか説明する場面を想像することにする。二通りの感じ方に対応する形容表現を各々列記してみる。

(1) 生理学的感覚に密着した判断

やわらかい、かるい、しずかな、小さい、白い

(2) 脳レベルの感覚での判断

固い、激しい、大きい、甘い、明るい、かぐわしい、楽しい、

肌に触れれば柔らかな人でも、人間としては固いことはあるであろうし、動作は静かでも、内面は激しい気性の持ち主かもしれない。また小柄ではあっても、人物として大きいということもありうる。二通りの感じ取り方があるから、一見矛盾するような形容表現が同一人物について用いられるのである。生理学的感覚を通した判断では“弱い”と思われる人物も、脳レベルの感覚だけで判断すると“強い”ということになるかもしれない。

表現形式として見た場合、(2)に挙げた脳レベルでの感覚判断を表す表現は、本来他の感覚を表す語であるという意味で、共感覚比喩表現と言える。人を形容する場合は、上に見たように多くの種類の感覚形容語を用いることができる。実際、色感覚以外、全ての種類の感覚形容語が、人を表現するのに用いられる。もっとも使用可能な形容表現の種類は、名詞によって異なり、例えば“山”や“川”を共感覚比喩で表すことは難しい。“思い出”を形容するには“甘い”“暗い”“楽しい”と、味覚、光感覚、気分感覚の形容表現は用いられるが、触覚や動静感覚の形容表現は用いにくい。

更に、“いい”“わるい(いやな)”といった形容詞が、ここでも使用可能であることは、注意すべき点であろう。上で見た花子さんについての形容表現(1)(2)は、レベルの違いはあっても、共に感覚として受け止めた結果を表すもので、どれも感覚形容語と呼べるものであった。しかし、感覚形容語の他に人を形容できる表現として“あくどい”“ずるい”“おっとりした”といった性格を表す形容表現が可能であり、更に、人物全体に対する判断を表す“いい”“わるい”“いやな”などの形容表現が可能である。“山”“川”“思い出”についても同様に、“いい”か“いや”かはどの語にも共通に用いることができる。“いい”“わるい”(あるいは“いやな”)といった形容詞はほとんど全ての名詞に使うことが可能なのである。感覚を指す名詞にも、その他の事物を指す名詞にも使えるという、非常に特殊な性質を持った形容詞であると言えよう。

### 3.3. 形容表現の体系

以上、主に共感覚比喩表現を通して、感覚形容表現を中心に形容表現を観察してきた。3.1.では共感覚比喩に見られる感覚形容表現の比喩の方向をまとめ、

3.2.では感覚以外の事物を形容する表現について検討を加えた。そこでは多くの事物について、色感覚以外の感覚形容表現による共感覚比喩が可能であることが明らかとなり、また“いい”“わるい”(あるいは“いやな”)といった形容詞の、ほとんど全ての名詞を形容可能という特殊な性質が明らかとなった。これら2つの結果を3.1.でまとめた感覚形容語についての体系に加えて、共感覚比喩における形容表現の体系をまとめると、次の表となる。

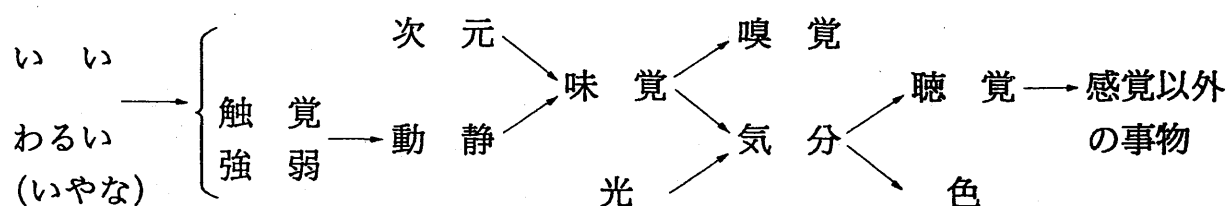


FIGURE 3. 形容表現の体系

#### 参 考 文 献

- 国 広 哲 弥 1989. 「五感をあらわす語彙：共感覚比喩的体系」『言語』, 18, pp. 28-31. 大修館書店。
- 楠 見 孝 1988. 「共感覚に基づく形容表現の理解過程について：感覚形容語の通様相的修飾」『心理学研究』, 58, pp. 373-380。
- . 1990. 「比喩理解の構造」芳賀 純, 子安増生(編), 『メタファーの心理学』, pp. 63-88. 誠信書房。
- Smith, J. 1989. *Senses and Sensibilities*. John Wiley & Sons, Inc.
- Williams, J.M. 1976. "Synaesthetic adjectives; a possible law of semantic change." *Language*, 52, pp.461-478.
- 山 田 仁 子 1992. 「More than Five —— 共感覚が浮き彫りにする五感以外の感覚 ——」『徳島大学教養部紀要 (外国語・外国文学)』第3巻, pp. 75-83. 徳島大学教養部。